世界旅打ち気分

●第67回・オーストラリアで移動に困った話

須田鷹雄

写真1）馬場入りしたアルビオンパークの各馬と、それを見る親子

写真2）バンクスタウンの装鞍所と入場者たち

写真3）バンクスタウンのレースと観客

https://www.instagram.com/sudatakaoshoten/

今回は、訪問場の「在庫」が残っているオーストラリアから何場かをご紹介するが、テーマはその競馬場だけでなく「交通手段」についてもお話ししたい。

レンタカーなら競馬場の行き来はなんとでもなるのだが、そうでない場合は移動手段の確保が必要となる。鉄道駅から徒歩でアプローチできる競馬場はどちらかというと少数派だろう。

行きはどこかの駅からタクシーで到着できる。問題は帰りだ。

この連載で触れたことがあるか覚えていないが（当時の写真がないので扱っていないはず）、交通手段でいちばん肝を冷やしたのはオーストラリア・QLD州のゴールドコースト。いまもあるサラブレッドの競馬場ではなく、既に廃止になってしまったハーネスの競馬場だ。

この競馬場は、最終レースが終わったあとの撤収がやたら早く、気が付いたら客はもちろん、従業員の姿もほとんどなくなっていた。タクシーの姿などはなく、町中から離れたところにいきなり取り残されたのだ。

スマホはおろか、向こうで使える携帯電話自体持っていない時代、頼れるのは公衆電話だけ。幸い、タクシー会社の電話番号が壁にあったので、そこにかけた。拙い英語にオペレーターさんは戸惑っていたが、なんとか競馬場までタクシーを1台配車してもらい、事なきを得た。

同じQLD州では、珍しい配車手段というのも経験したことがある。

首都ブリスベンにある、アルビオンパークというハーネスの競馬場に行ったときのことだ。レース観戦を終え、当時正門の近くにあったタクシースタンドに行ってみたが、そこにタクシーの姿はない。

その代わり、細い電柱のようなものが立っていて、なにやら説明書きがある。読むと、「1ドル硬貨を入れると電波が飛んで、タクシーが配車されます」とのこと。半信半疑で1ドル硬貨を入れると、本当に10分ほどでタクシーが来た。世界中にはいろいろなタクシー配車手段があるだろうが、あの方式はアルビオンでしか経験したことがない。

このアルビオンにはグリーンチャンネルのロケで18年に再訪（ロケ終了後に遊びで行ったので、放送には乗っていない）したのだが、最初の訪問から20年近く経ち、旅打ち経験を積んでから場内を見てみると、なかなか味わいがあった。時代の流れで入場者は少なく、施設の老朽化も進んでいるのだが、それなりにまともな食事を出す売店があったのは嬉しかった。空港と市内中心部の間にある競馬場なので、そのうち再開発がらみの廃止話などが出そうで怖いが、粘れるだけ粘ってほしいところだ。

この18年訪問時は、帰りの交通手段で痛い目に遭った。当時向こうで普及しはじめたライドシェアアプリのUberを入れてまもないときで、それを使って車を呼んだ。ホテルまでスムースに到着して「便利な時代になったな～」と思っていたのだが……

Uberはドライバーと利用者が、相互に☆1～☆5のレーティングを付けることになっている。こちらは☆5を付けたのに、なんでか知らないがドライバーから☆1を付けられたのだ。揉めたりは一切していないので、黄色人種というだけで付けられた気がする（当時オーストラリアで反中感情が高まっていたので、中国人と間違えられたかもしれない）。アプリを使いはじめた頃だったので自分のプロフィールに出る平均☆の値が3とか3.5とかになってしまい、その後車を呼ぶときになかなか来てくれないというダメージがあった（ドライバーは利用者の☆を見て配車に応じるか決める）。皆さんも海外でUber・Lyft・Grab等を使いはじめるときにはご注意いただきたい。

もう一場、こちらもオーストラリアから、NSW州のバンクスタウン競馬場をご紹介しよう。ここはシドニーから電車で近場まで行けるのだが、駅から競馬場はタクシー等になる。行きはもちろんタクシーを使って順調に着き、競馬を楽しんだ。古びてはいるがそれなりにしっかりしたスタンドで、活気のある昼開催だった。

確認したところ、訪問したのは09年の5月。まだスマホ時代ではなく、Uberも無かった頃だ。

そこで競馬場の事務所に行き「タクシー呼んでもらえます？」と聞いたのだが、めんどくさそうな顔をしたおばちゃんが「外にいるから普通に乗れ」。これが罠で、実際にはタクシーなどおらず、しかも最終レース後だからオフィスは閉められていて「タクシー居ないじゃねえか！」とも言えない。

最近はイングリス社のセリに行くときにこの競馬場の横をよく通るので土地勘もあるが、当時は全く知らない土地。そこでいきなり放り出されたわけだ。

あちこち歩いてみるが、流しのタクシーはない。ガソリンスタンドがあったので「タクシー会社の連絡先分かる？」と聞いてみても分からないと。困り果てたとき、1ブロックくらい先に、たまたま客を乗せてきて下ろしているタクシーがいた。猛ダッシュして乗せてもらいなんとかなったのだが、奇跡のタイミングでタクシーが来ていなかったら本格的に難民化するところだった。いまならどこに放り出されてもUberで解決できるから、15年という月日の流れは大きい。

ちなみにこのバンクスタウンという街、シドニーに住むハイソサエティの間では「治安が悪い」とされており、まあシドニー内での相対的な評価ではそうなのだろうが、実際に危ないことはほとんどない。駅のあたりはベトナム人街で、「なんかアジア人がいっぱいいるゾーン」ということでウケが良くないのだと思う。

しかし我々はアジア人なので、このバンクスタウンとか、近くのカブラマッタといった街は、むしろ「落ち着くわ～」くらいの話である。バンクスタウンにはマ.シンのみのカジノがあり（馬券が買えるTABもある）、わりと宿泊費の安いホテルと一体になっている。その向かいには「シドニー地区で一番に選ばれたのフォー（ベトナム麺）屋」もある。数分のところには、「韓国人が経営する和食屋」があって、定食・ラーメン・うどんなど、「そんなに悪くないインチキ和食」を出してくれる。

バンクスタウンのスーパーはベトナム色が強いが、カブラマッタは中華グローサリーがメインで、日本・韓国の食品を置いている店も多い。めちゃ旨くてめちゃ安い中華料理屋も発掘してある。ハイソな人たちからは「あんな土地！」と言われるが、実はシドニーのセリに行くたび、ここでの買い物や食事は欠かせないということになっている。かつて交通手段がなくパニックになった土地が、いまやちょっとしたホームである。